

入澤達吉関係資料（日記類）



『当用日記』昭和12年11月26日条



『当用日記』明治39・41・42・43・45年

- 〔指定年月日〕 令和二年二月一〇日
- 〔種 別〕 指定有形文化財（歴史資料）
- 〔名 称〕 入澤達吉関係資料（日記類）
- 〔点 数〕 四十七点
- 〔所有者等〕 個人
- 〔所在地等〕 大宮一―二〇―八（郷土博物館）

指定有形文化財（歴史資料）

入澤達吉関係資料（日記類）

東京帝国大学医学部教授にして大正天皇の侍医頭も務めた医師・入澤達吉（慶応元（一八六五）年〜昭和一三（一九三八）年の日記および随筆であり、総数は四十七点である。

最も古いのは明治一四（一八八一）年、十七歳の記録で、最も新しいのは死の直前まで記された昭和一三（一九三八）年のものである。途中、明治二八（一八九五）年の後半から明治三六（一九〇三）年の約八年半と、大正時代の数年間を欠くが、達吉の生涯をおおよそ網羅する自己記録である。

越後国新発田藩領（現・新潟県見附市）に生れた達吉は、幼少期に父を亡くし、医師である叔父・池田謙斎の勧めで上京して医学の道を志す。帝国大学医科大学に進み、E. ベルツに師事して内科学を専攻した。卒業後にドイツ留学を果し、帰国後は内科診療を続けながら、帝国大学医科大学の教員となる。大正九（一九二〇）年には宮内省御用掛を仰せつけられ、同一三（一九二四）年には侍医頭を拝命している。

日記類の内容は、学生時代の日々の出来事、留学時代の見聞、医師となつてからは診療や講義・学会の記録など多岐にわたる。他に日本内外の時事やその感想、家族の行動なども豊富に記録されている。達吉の社会的地位から見聞きした

種々の出来事や幅広い交友を知ることができる貴重な資料である。

また、達吉個人の伝記的記述を通じて当該期の知識人の行動様式や思考法を窺い知ることもできる。さらに、皇室や国内外の政治・文化など多方面での活躍の記述は、皇室史や政治・外交史、文化史などの既知の同時代資料と読み合わせをすることで、新たな歴史叙述を引き出す可能性を持っている。

【文化財旧所在地】旧入澤邸

